

廃棄野菜でおいしいスープを 神戸でディスコスープデー開催

4月29日、「ワールドディスコスープデー」が世界中で同日開催された。
世界100カ所以上、30カ国以上で開催され、日本からは神戸市と東京都が参加した。

【ディスコスープとは】

形が悪い、キズがあるなどの理由から廃棄されてしまう野菜類を使ってスープを作り、音楽やダンスなどを交えたディスコパーティのようなイベントにすることで、楽しみながら食料廃棄の問題を知り、学ばせようとするのが目的としている。

主催するスローフードユースネットワーク(以下、SFYN)は、青年を中心とした世界最大規模のネットワーク。「ディスコスープ」を看板イベントとし、食品廃棄問題の啓蒙活動をはじめとして、食の分野で社会に問題提起している。2004年からヨーロッパを中心にこの活動が広まった。日本にも東京や京都、沖縄に支部があり、神戸は昨年発足した。ディスコスープデーは、2012年にドイツで初開催されて以降、世界各地で、東京では昨年より毎月開催し、世界同日の開催は今回が初めて。次回、神戸市単独での開催は6月24日、青空ヨガイベントとのコラボとなる予定だ。

神戸を盛り上げる 官+学生の熱い思い

神戸市での開催は、SFYN神戸の学生ボランティアが中心となって企画。「世界のごちそう博物館」の本山シェフを中心に、廃棄される予定だった野菜や酒粕を使って酒粕スープを作り、学生バンドによる音楽とペイントライ



食品廃棄問題を訴求するためのパネルを随所に設置。



本山シェフや学生ボランティアたちとスープづくり。

ブで盛り上げた。会場の横では、神戸市共催のファーマーズマーケット「EAT LOCAL KOBE」が行われており、その流れで訪れた人も多かった。途中、雨で中断したため、200杯の販売予定は達成できなかったが、中心メンバーの一人、神戸大学3年生久保陽香さんは、「情熱と愛情を持って野菜を育てる農家さんや農業のことを、若い人にもっと伝えたい」。関西学院大学1年生の岩本拓真さんは、「次世代の子どもたちが自分で食材を見極められる世の中にしたい」と熱く語る。

後援した神戸市は、2015年に「食都神戸2020」プロジェクトを掲げ、昨年には



開催から3年目を迎える地産地消の青空市場、ファーマーズマーケット。毎週開催することで、神戸の食が暮らしの一部となる。

SFYNの母体団体スローフードインターナショナルと連携事業を開始し、SFYN神戸の設立へとつながった。担当者は、「地元食材や事業者との融合で、神戸の食文化も盛り上がれば」と、今後も協力していく方針だ。

学校給食レシピ本 芦屋市教委が発売

芦屋市教育委員会が、レシピ本「芦屋の給食 オシャレな街のおいしい献立」を5月に発売した。芦屋市の学校給食は、校内に調理施設を持つ自校式給食で、かつ市内の9校ごとに献立が違う自校献立となっている。各校に1名栄養士を置き、学校ごとにオリジナルの献立を作っているのは珍しい。ソースやルウ、ジャム、ふりかけにデザートまで手作りにこだわり、市は「豊かな食体験は、子どもたちの味覚と心を育む教育」として、給食における食育に力を入れている。今回、その集大成としてレシピ本を発売。単なるレシピ本に留まらず、食事のマナーや栄養士、調理員たちの思いも入れ、芦屋市の給食に対する考えが集約された内容となっている。

また、地方創生事業のひとつとして、地域活性化を願う側面も持つ。芦屋市教育委員会の担当者は「この本を見て、芦屋を出た人が芦屋を懐かしんだり、戻ってきてもらえたら」と期待を寄せる。



ジュンク堂芦屋店、三宮店、阪急西宮ガーデンズ店ほか、全国の有名書店やアマゾン、芦屋市役所でも購入可能。1,080円(税込)



精道小学校で出される「スペシャル牛丼」。市内の二つ星日本料理店が監修しているところ、子どもたちにも人気のあるメニューのひとつ。



旬や季節の行事も大切にしている。食材は主に兵庫県産を使用。自校献立で仕入れは小ロットのため、少量生産の地元農家から購入することもあるという。

神戸市への移住を促進 シティプロモーション

人口が減少するなか、移住人口の促進や観光人口の増加、産業振興など、地方活性化を目的に各自治体がさまざまな戦略のもと魅力発信のためのシティプロモーションに取り組んでいる。前編の今回は神戸市、後編は西宮市、芦屋市の特徴的な施策を取り上げる。

神戸市では、平成27年度に策定した「神戸2020ビジョン」において、若者に選ばれるまちを目指し、「若者の神戸市への転入を増やし、東京圏への転出超過2,500人を解消」という目標を掲げた。その施策の一つが、



「KOBE live+work(神戸 リブ・アンド・ワーク)」
<http://kobeliveandwork.org/>
移住体験者の体験レポートは、神戸市民が読んでも新たな気づきがあって興味深い。



移住体験事業の宿泊施設は、本来の居住・生活環境に近いものとなるよう、北野や海岸通などの一般のマンションを用意した。

神戸市に移住を促進する取り組みだ。なかでも特徴的なものは、平成27～28年度に実施した移住体験事業「LIVE LOVE KOBE(リブ・ラブ・神戸)」。これは、神戸で居住体験し、住みやすさを感じてもらえるように企画されたもの。神戸に移住を検討している兵庫県外在住者を対象に、市が用意した物件に3泊～2週間滞在。併せて「神戸の名店BARめぐり」や「商店街めぐり」、「神戸の農ライフ体験」など、地元の市民が案内するツアーを企画し、単なる観光では発見できない魅力を伝えた。多くの申し込みがあり、神戸市の移住促進の取り組みが認知されはじめた。今年度も若年層を対象に、移住体験事業を実施する予定。

薬物乱用の防止

～「一度だけ」では済まない危険性～ 協力:兵庫県警察



【兵庫県内の薬物情勢】

- 覚醒剤 昨兵庫県内の薬物事犯検挙人員の約7割を占め、特に依存性が強く、継続的な乱用に陥る傾向が見られる。
- 大麻 ここ数年検挙人員が増加傾向、初犯者や20歳代の割合が高い。薬物の前科・前歴を有しない若年層が「タバコ感覚で乱用できる容易さ」から乱用に陥る傾向が窺える。
- 危険ドラッグ 平成27年2月末に兵庫県内の販売店舗を全店廃業させたが、インターネット等を利用した無店舗・配達形式に移行しているとも言われており、販売方法の巧妙化・潜在化が懸念されている。

【薬物乱用の危険性】

薬物には、依存性や耐性があり、乱用により精神と身体両面が致命的に破壊されて最悪の場合死に至る。また、乱用者が薬理作用から幻覚、妄想等の精神障害に陥り、凶悪な犯罪や重大な交通事故を引き起こしたり、薬物の購入資金を得るため犯罪を犯すなど、社会全体に弊害を及ぼしている。

悩まず、まず相談を
覚醒剤や薬物に関する悩みや、薬物乱用に関する情報は
覚醒剤110番 (078) 361-0110

兵庫県警は各関係機関と連携し、薬物の危険性や有害性への正しい認識と、「薬物乱用は許されない」という強い意識、薬物乱用を拒絶する気運を醸成するとともに、供給の遮断に向けた取締りを推進している。